

【義心の芽】廖化

見渡す限りの荒野にある切り立った岩山と青々とした草木が青々と茂る大森林との境界線に、広大な戦の陣が敷かれていた。

荒野の強く乾いた風が汗塗れになった屈強な筋肉を乾かし、同時に細かい砂の粒子を肌の正面に貼り付ける。

森林を流れる清らかな川の流れに飛び込めば肌を汚す汗や砂を一気に洗い流し、筋骨逞しい兵士たちの張った筋肉が滑らかな照りによって凹凸を強調させる。

事実、先ほど野戦を終えたばかりの兵士たちは鎧を脱ぎ捨てると喜び勇んで川に飛び込んだ。戦い慣れた者が多数を占めるとは言え、常に生死の境界で戦う者として休息は必要で

ある。

複数の重い足音に続いて何重にも水の破裂音が響き渡り、川の中は雄の溜まり場と化していた。

娯楽の少ない遠征先で数少ない寛ぎの場所であり、同時に遊びの場である。ある兵士たちが水遊びを始めれば、それに巻き込まれた別の兵士が怒号を上げるなどは日常的な光景である。

「よし、警備の引継ぎも無事完了したな。荒野側と森林側、どちらも警備する必要があるのが難しいな」

「そうだな。とは言え己れ達が手を抜く訳にはいかない。荒野側は見晴らしが良く土地の起伏が激しい。森林側は水場や食料が豊富に見つかる。上手く機能させれば最高の先陣になる」

「全くその通りだな。何より水と食料が豊富なのは有り難い。……で、ワイは早速川で水浴びしようと考えているが。廖化、お前は どうする」
廖化（リョウカ）と呼ばれた槍兵は並んで歩いていった兵士に問われた。

黄色い頭巾に獅子のように生えた濃い顎髭を蓄えた廖化は上下も黄色と白を基調にした軽装備を着用していた。

他の兵士よりも屈強かつ豊満に鍛えられた全身の筋肉が装備の上からでも分かる様に膨張しており、覗く腕や首元は汗で濡れて砂の粒子が茶色い膜を作っていた。

任務の終了後の為か太い眉毛は下がり柔和で純朴な笑顔を浮かべている。角ばった顎を髭ごと触りながら非常に安心した心持ちで森林の中を歩いていた。

元は賊として裏の道を進んでいたが、この

一軍の長たる將軍の進むべき道に惹かれ兵の一人として参加をしたのだ。

「己れはまだ遠慮しておく。まだ今日の修業を終わらせてない。それが終わってから行く」

手に持った槍を掲げて見せるようにして廖化は答える。

大柄な廖化の身長以上もある長槍は穂首からたなびく赤い布がまるで軍旗のように見える。

使い込まれた柄とは対照的に、穂先は多少砂を被っているだけで美しい鈍色の輝きを放っている。常日頃休まず手入れをしている証だ。

「ああ、そう言えばお前は前線の一団に組み込まれたんだっけな。クソッ、羨ましいねえこの筋肉地味野郎が!!」

「イデッ!? お、おいちょっと止め……つて首、

首締まる！くっ……首離せ！い、息ができないな。……っ、地味は余計だ！」

兵士が笑顔のまま力を入れずに、ふざけ半分で首を締め上げると、廖化もふざけに乗って必要以上に大きな動きで抵抗する。

一般兵士として時に喧嘩し時にじゃれ合ってきたが、前線に赴けばその頻度は確実に下がるだろう。下手をすれば、同じ立場では二度と会えないかもしれない。

そんな同僚への羨ましさ半分嬉しさ半分の気持ちを伝えるためにじゃれ付いたのだと、廖化には即座に理解できた。

「……ゲホゲホッ！す、少しは手加減してくれよ。本当に落ちると思ったぞ。それに己れは地味ではない！将来の凡将と言ってくれよ」
「へへッ、悪い悪い。つい昔の悪い癖が出てしまっつてな。……また、今度も一緒になれるとい

いな。じゃあな廖化！後で絶対川に来いよ！」
「あ、ちよつと待つてくれ！まだ言い足りない事が……。行つてしまったか」

不自然に元氣な声を出しながら遠ざかる見慣れた背中を見送ると、残念そうに溜息を着いた。

賊出身の廖化にとつて軍人としての出世は嬉しいが、それによる別れは悲しいものだ。一生の別れではないが己一人が上に行くことの寂しさを、廖化は今実感している。

「……立つていても仕方ない。早速修業を始めるな。あいつ等に怒られてしまうな」

大地の境界線から少し森林側に入った物陰。波打つように切り立った崖の根元に生い茂る多くの木々は、その一か所だけを隠すように存在していた。

適度に空間も開いており、枝葉に散らされ

た日光と木々を抜ける冷たい風が適温を保ってくれる。突き出た崖の壁面が視界を遮り簡単には発見されない。

この『修業場』は兵士たちの間ではちよつとした有名地になつており、修業は勿論修業合間の食事や監視の野営地、果てはサボり場所にまで活用されている。

『凡将』か……。地味地味言われ続けているが、細くても長く戦い続けたものだ。他人の声より己の心情、だな」

慣れた足取りで修業場まで辿り着くと、廖化は槍を置いて上半身に着ていた装備を全て脱ぎ捨てた。同時に太い両腕や更に太い首を軽く回転させて筋を伸ばし、軽い準備運動を行う。

まるで女の胸のように厚く鍛えられた胸板は装備の締め付けを失い提灯のように大きく

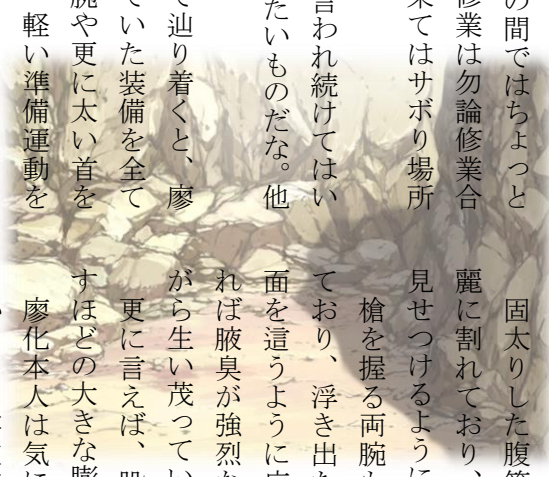
盛り上がつていた。その上に乗る乳輪と乳首も比例するように大きく、鮮やかな桃色をしている。

固太りした腹筋は豊満さを残しながらも綺麗に割れており、呼吸をする度その逞しさを見せつけるように伸縮を繰り返す。

槍を握る両腕も丸太のように太く鍛えられており、浮き出た血管が盛り上がる筋肉の表面を這うように広がっている。腕を回転させれば腋臭が強烈な濃い腋毛が湿り気を帯びながら生い茂っているのが分かる。

更に言えば、股間には履物の布地を押し出すほどの大きな膨らみが確認できる。

廖化本人は気にしてないが、通常の状態でもかなりの存在感を放っている。それが腕以上以太い太腿に挟まる位置で履物と褌の中に収納されている。



誰かが岩陰に置いたであろう竹の水筒から冷たい水を、頭巾を巻いたまま脳天から一気に被る。

火照った全身の筋肉が冷たさで一気に引き締まり硬くなるのを感じる。脳内も修業を行うのに適した集中力を獲得し、表情も凛々しさを獲得した。

廖化はそのまま槍を拾い上げ両手で掴み、体勢を整えて精神統一を行う。使い慣れた柄の握り具合を確認するように軽く扱き、掌の汗を履物で軽く拭う。

そして、片足を強く踏み込んで穂先を真正面に勢い良く突き出す。

「ふんっ！ほっ！うらあっ!!」

突きから上への薙ぎ払いへと流れるように移行し、相手に体当たりするようにとどめの一撃を食らわせる。

その後集団を想定した大振りな槍術を徹底的に繰り出し続け、次に全身を使った柔軟性と平衡感覚を培う演武を継続して行い汗を流した。

槍を振り回し続けるにつれて上半身の厚い肉が中と外から揺さぶられる。鍛えられた筋肉が激しい動きによる伸縮によつて一層張りを持つて膨張し、脈動する血管を太く浮かび上がらせる。

太い首から滲み出る汗が鎖骨に溜まり胸板や乳首に向かって溢れ滴る。濡れた肌はじつくり焼いた照り焼きのように輝く。

周囲に飛び散る汗が地面に染み込み、薄らと白い湯気となつて無骨な雄の濃厚な熱気と臭気を沸き立たせる。

既に乾いていた頭巾に染みた汗は眉間や頬を通り獅子髭を濡らし、濃い腋毛の樹海も大



袈裟に濡らす。

廖化自身は気付いていないが、汗によって体臭は一層濃密な雄臭さを強くしており、廖化の全身を包み込んでいた。

「ふっ！ふんっ！どおりやあ!!……はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……ふう。そろそろ陽が天井に来るな。そろそろ川に向かって……」汗を脱ぎ捨てた装備で軽く拭いながら修業を終えると、廖化は水筒から水分補給をして約束の川へ向かおうとする。

が、下半身に突っ張るような若干の違和感を覚え視線を向ける。

「……はあっ、不味いな。ここの所修業漬けたが、まさかこんなに反応してしまうとは。このままでは合流できない」

激しい修業と演武によって刺激された股間は、廖化本人が気づかぬ内に大きく膨張して

いた。締め付けるようにして巻かれた禪の荒い布目が、荒々し動きと重なって魔羅を掻き上げていた。

意識した途端に強烈なむず痒さと恍惚感が股間から全身に広がり、禪の中で一層硬く長く勃起し始める。

既に禪を越えて履物にまで先走りの染みが滲んでおり、尖った膨張部の先端から量を増しながら溢れ出てくる。

魔羅に力を入れると先端が息苦しうに上下に動き、濡れた布地越しに薄らと剥き出た亀頭の形が浮かび上がる。

「仕方ない。……ここで一度抜くか。ほ、他に誰もいない……よな？」

兵士同士集まって自慰行為をすることは多々あるが、廖化はあまり好きでは無かった。恥ずかしさもあるが自分一人の方が好きなよ

うに弄り喘ぐ事が出来るし、集中して手と腰を動かせる。

そして、何より美味しそうな魔羅に囲まれた上にその射精の瞬間を凝視していると、自分の雄好きな性癖が見抜かれてしまいそうだからだ。見たいのはやまやまだが、堂々と見ながら理性を保てるほどの強い意志はまだ持てていない。

周囲の気配を確認しながら変化は腰紐を緩めて落とすように履物を脱ぐ。股間の膨張への引つ掛かりを外し、同時に靴も蹴る様に脱ぎ捨てる。

汚れが目立つ汚い禪は強烈な雄臭さを沸き立たせながら先走りに濡れていた。魔羅はその大きさを故に勃起するとすぐに脇から零れ落ちてしまう。

実際、禪を押し退けて股から抜け出し、堂々

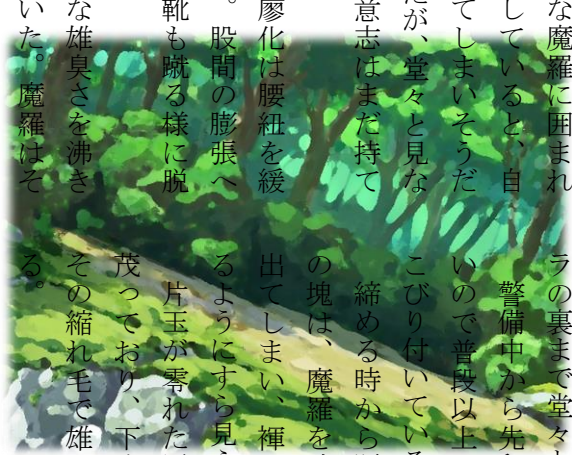
と勃起している上に垢塗れで雄臭さも強烈であつた。まるで熟れた果実のような亀頭をエラの裏まで堂々と晒していた。

警備中から先程、まで一切体を洗っていないので普段以上に垢や汚れが魔羅全体にまでこびり付いている。

締める時から既に禪から飛び出していた陰毛の塊は、魔羅を追いかけるように殆どが飛び出てしまい、禪の布地を覆い隠そうとしていくようにすら見える。

片玉が零れた巨大な睾丸の周囲にも鬱蒼と茂っており、下腹部から尻まで広範囲に亘りその縮れ毛で雄の湿った熱と臭気を蓄えている。

「……うわつ、臭え……。我ながら体臭の強さと性欲の強さには困惑するな。……早く処理しないと」



魔羅を掴んで一扱きした掌の臭いに圧倒されながらも、廖化は岩壁に背中を預けて腰を下ろす。

風雨に晒され剥き出しの岩の表面が背中の中の厚い筋肉を刺激する。火照った体を冷やすように岩壁は冷たく、理性を失いつつある廖化とは正反対の冷徹さを感じさせる。

そのまま両足の太腿が一直線になるように股を最大まで広げると、魔羅で外気の感触を確かめるように揺らしてから、その姿勢のままいつものように魔羅を扱き始めた。

先走りで魔羅全体を濡らして淫靡な水音を大きく立てながら腕を動かす。

敏感な亀頭周辺を集中して捏ね繰りながらも、魔羅を根元から搾り様に大きく上下に動かす。亀頭が大きければ鈴口も大きく、鯉の口のように物欲しげに伸縮を繰り返す。

もう片腕では廖化の隠れた性感帯である大きな乳首を弄っていた。大量の涎を潤滑油にして胸板の肉を鷲掴みしながら激しく刺激する。

昔から弄り続けて長さや硬さ、そして敏感さを獲得した乳首は黒く変色し、下手な女よりも妖艶な胸元をしている。厚い胸板も適度な柔らかさもあり、体毛を除けば並みの女には負けない美胸の持ち主であると、廖化自身8
思っている。

そんな胸板を惜しげも無く揉み扱いていると、まるで自分が『ウケ』側に回り犯されているような感覚に陥り、それが大きな乳首を一層勃起させる。時に爪を立て、時に強く捻り緩急をつけながら豊満な胸板ごと虐めるように弄り続ける。

「はあ…はあ…はあ…はあ…んぐううううう

うっ……！こ、こんなに感度が良くなって……んあっ？！気持ち……気持ち良過ぎて……手が止まらん……あっあっあっあっあっあっお漏らし止まらん！己れの白いのが……白い子種が漏れてしまいそうだ……！！あっ……くうっ！も、もう漏れるっ。己れの子種が……んっ！ぐうううううううう……っ！！」

廖化の表情が恍惚から一瞬にして我慢の表情に変わる。同時に両足が痙攣し合よりに伸び切り、腰が前に突き出されたように浮かぶ。魔羅を扱う手は強い力で皮を根元まで引っぱり、乳首を弄る手は変形しそうなほどに強く抓んで引っ張った。

廖化の溜めに溜め込んだ大量の子種は白い噴水となって勢い良く射精された。手の中で魔羅が激しく脈動するのが感じられ尿道が蛇のように波打っている。持ち上がった睾丸は

子種を押し出すために強く引き締まり、同時に肛門の強く締まってしまう。

濃厚な子種は前方の地面に染み込むだけでなく、反対方向の廖化本人の上半身まで白く汚した。強い粘り気で割れた腹筋から丰满な胸板、太い首筋に獅子髭はえる角ばった顔にまで容赦なく注がれる。

口を開ければ雄独特の濃縮された強い苦みが舌を挟り、飲み込めば食道を犯すようにネツトリとゆっくり落ちていく。

同時に沸き立つ腐臭のような雄臭さが鼻腔を刺激し、想像以上の強さに一瞬意識を奪われそうになる。

射精の快感に浸りながらも、廖化は子種を自分の体に塗り込んでいく。そして滑りが良くなる反面雄臭い熱気を沸かせる体を執拗に揉み始めた。

自分が思うが儘に指先を動かし筋肉の表面を滑らせる。未だに射精が続く魔羅を扱き続けながら、溢れる子種の膜で全身を包み込むように塗りたくる。

乳首が真つ赤に腫れるまで弄った指先で肌飛び散った子種を掬い取ると、五本の指全てに満遍無く絡み付かせた。

指先で軽く擦り合わせると、強い粘り気によつて白く濁った小さな泡が生まれる。泡は破裂せずにそのまま千切れるように真下に滴り落ちた。

虚ろな目と荒い呼吸をしながら背中を起こして地面の上に横たわる。そのまま片足を最大まで持ち上げて股を広げて、濡れた指先を背中側から己の尻に向かって伸ばす。

豊満な肉の双丘と陰毛の樹海が尻の谷間に隠しているが、その二つの障害を突き破る様

に小刻みに震わせながら指を谷間に進めていく。

肉の柔らかさを堪能して進むにつれて廖化の表情は一層快感に沈んだ表情になり、熱い呼吸が吐き出される口からは獅子髭を汚すように涎が一筋垂れる。

「くっ……くううつ!! 己れの肛門が疼いて……かはあつ! んぎいつ!? 中が痒い……中が疼いて欲しい……! 己れを串刺しにしてくれる魔羅が欲しい!! ああああ誰か来てくれえ。誰か己れの肛門に大魔羅を奥まで突き刺してくれえええ!!」

久しぶりの自慰行為の想像以上の快感に廖化の理性は意外なほど簡単に崩壊した。

雄叫びに後押しされるように指を一気に肛門へと突っ込むと、物欲しげに波打つ柔らかい腸壁に爪を立てて刺激した。複数の指を一

纏めにするように腸液が絡み付き、無骨で太い指を艶のある粘り気と雄臭で包み込む。

指の根元まで突っ込むと、真っ赤に腫れた肛門が大きく口を開けて尻の谷間から姿を現す。

入り口の壁が伸び切り噴出した腸液が肉や陰毛を汚し、中を掻き混ぜれば掻き混ぜる程白い泡となつて塊のまま落ちる。泡の塊が地面で弾けると熱気と同時に濃厚な雄臭が沸き立ち、膠化の硬く鍛えられた太腿を汚す。

体位を横向きから仰向けに変えながら一度指を抜く。すっかり緩んだ肛門と指先の間に腸液の糸が張られ、重力によつてすぐに千切れる。

その濡れた指で傍らに置かれた己の槍を掴むと軽く振り回して土を払う。柄の尾の部分に口を含んで別の誰かの魔羅を咥え込むよう

に執拗に舌を這わせて涎を絡ませる。

膠化の長年の努力と汗が染み込んでいる、使い込まれ色褪せた槍の柄は、妖艶な照りと生臭さを放つ太い張り形へと姿を変える。

普段から見慣れた筈なのに、この瞬間だけは硬く勃起し雄々しく脈打つ、立派な魔羅に見えてしまう。想像に呼応するように股間の己の魔羅も激しく脈打ち再度の射精の気配を漂わせる。

「あっ……ああっ……もつと太いのが欲しいっ！もう我慢……出来ねえ……！！ぐううっ、あつ、あぐっ、ふがあああああああああんっ！！」

仰向けのままで股の間を魔羅越しに確認しながら、一気に柄を肛門に挿入する。圧倒的な硬さと長さが膠化の中を突き進み、歓喜の雄叫びと共に全身が不自然なほどに激しく痙攣

する。

魔羅が大きく揺れ動き、鈴口から一度だけ鉄砲のように子種の弾が発射される。勢い良く発射された白い弾は放物線を描いて廖化の顔面にぶつかる。

上澄み液を全て漏らした後の一層濃厚で新鮮な子種の雄臭と苦みが、性感帯を弄る両腕の動きを加速させる。

出し入れの際は勿論、回転させるように柄を動かし、腸壁の中から肛門を緩めるように大きく腕を動かす。廖化の体が弾み筋肉が伸縮する度に肛門から腸液が噴き出し、それぞれ射精したように弧を描いて地面を汚す。

雄の性感帯である前立腺を徹底的に突き上げると表情が悦楽に沈み犬のように舌を垂らす。

鼻水すら拭う余裕も無いままに野獣のよう

に喘ぎつつ、己の魔羅と肛門を攻め上げる廖化の周囲は、戦場に立つ勇ましくも雄々しい戦士の強い生殖機能によって、濃厚さを増した体液に囲んでいた。それに加え沸き立つ熱気と雄臭は、雄欲に満ちた勇猛さを五感で感じさせる。

大陸の趨勢の変化の一端を担うであろう将来の汎将。その痴態は臨界点を突破しそろそろ限界を迎えようとしていた。

「あつ！がああつ！りゅ、りゅううう！劉備どのお……。い、逝くう……。己れもう限界で……ふんああつ！あつあつあつあつあぐうんっ！逝く逝く逝く逝く逝くううんっ！」

廖化が裏返る声で喘ぎ身悶えすると、柄は一気に肛門を貫き、厚く鍛えられた腹筋を体内から押し上げてしまった。下半身から全身に伝わる、痺れるような刺激が雄としての快感

に変わり、腰を持ち上げたまま不自然に四肢を硬直し痙攣させる。

雄として誇るべき長さと太さ、そして亀頭の大きさを持つ廖化の魔羅が股間の上で暴れながら勃起すると、持ち上げた金玉の底に溜まっていた一層濃厚な子種を射精した。

魔羅を掴む腕も不自然な痙攣によって扱く行為を止めず、天中を見上げるように勃起する魔羅から四方八方に向かって子種は溢れ出した。

将来の汎将である己の子孫を国中に広げるかのような勢いで周囲に白く濁った溜まりを作り、一層強い雄臭さと絡み付くような熱気を広範囲に拡散させる。

痙攣によって指が離れてしまうと、魔羅も大きく揺さぶられながら鞭をしならせるように子種を大量に撒き散らす。

深い胸板の谷間や腹筋の割れ目に子種が流れ込んで溜まり、痙攣し悶える掌で塗ったくれば自然と愛撫のような快感が全身を貫いてしまう。

同時に、柄を咥え込んだ肛門が締め付けるように入り口を閉ざすと、押し出されたように生臭い腸液が噴き出した。

先程とは違いまるで霧のように噴出される腸液はガスの抜ける耳障りな音と共に漏れ出し、廖化の槍の穂先まで粘々に濡らす。

「ああんっ！あっあっあっあっあっあっあっ……いぐっ！？ひんっ！？んぐ……っああっ！！み、見てくれえ！己れの中まで……己れの汚れた姿を全部見てくれよお。誰か、誰か見てくれえ……！己れを見たまま中に子種を仕込んでくれよお。己れ、このままでは切なすぎて頭が変になっちゃうよおお……！！」

脳すら揺さ振るほどの快感と開放感が、廖化の鋼の精神と肉体は、今や完全に淫靡な陰間のように弱弱しく落ちぶれた。

特殊性癖故の孤独感と強い性欲で羞恥心が崩壊し、他の誰かに己を凌辱して欲しいと望む。

同じ汗と血肉の臭いが充満する戦場で、生と死の狭間を己の力のみで生き抜く屈強な兵の肉体を欲する。

脛を閉じれば、そこには命を預け合う仲間の兵たちの裸体が浮かび上がる。屈強で豊満な筋肉、濃い体毛や髭、噓せ返る雄臭と熱気、巨大な魔羅と緩んだ肛門。

水浴びや手合せの中で凝視した裸体が妖艶さを増して脳内を駆け巡り、想像した喘ぎや肉の破裂音、弾ける水音が脳内で反響する。

「はあっはあっはあっはあっ、がはああああ…

………んっ！ふがああああ………!!」

最早言葉を紡ぐ事すら出来ずに、ただ激しく呼吸をしながら涎と喘ぎを漏らし続ける廖化。最後に決めの一発を汚い水音と共に前後の性感帯の肉穴から噴き出すと、力尽きたように体液の混ざった泥の上に体を沈めた。

酸素を求めるように腹筋を激しく動かしながら肛門に力を入れると、腸壁の蠢きと肛門の伸縮で槍の柄が大便のように捻り出された。廖化が短く喘ぎを上げると同時に柄が全て吐き出され、同じように雄臭の強い泥へと落ちた。

真っ赤に腫れた肛門は未だに緩みを保持しながら伸縮し続けており、赤黒い腸壁が呼吸に合わせて蠢き腸液を分泌しているのが良く見える。腸液は抜けた柄の上から垂れ流されており、糸引く粘り気で柄に妖しい照りを与

えている。

魔羅は硬さを無くし子種に濡れた腹筋に倒れ込むように萎えているが、そもその太さと長さは相当なものだったので雄としての迫力はまだ残している。力なく垂れた金玉の皺一枚一枚にも子種が浸透し、陰毛の樹海は白い膜に覆われ力なく萎んでいる。

廖化自身がもう一人の廖化に犯されたように全身が限なく子種に汚されている。廖化自身の射精の激しさと自慰行為の荒ぶり方が余程大きく強かったことを暗に示している。

投げ出された四肢は生暖かい体液の泥に沈み、時折思い出したように小刻みに痙攣し続ける。泥に波紋を生み出せば土の臭いに混ざって雄臭さと熱気がしつこい程に沸き上がる。

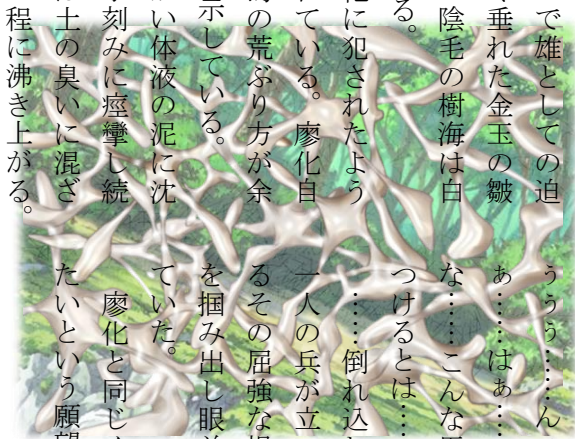
激しい自慰行為で疲労した筋肉から滲み出た汗とも混ざり合って、一層強烈で淫靡な雄

臭を周囲の木々にまで染み込ませる。

「はあはあはあはあ……あつ！……くううう……んっんっんっんっ！！……はあ……はあ……はあ……はあ……。りよ、廖化め。こんな……こんな馬鹿げた痴態を、禁欲中に見せつけるとは……！」

……倒れ込む廖化から離れた木々の陰に、一人の兵が立っていた。廖化の顔見知りであるその屈強な褐色の雄は、股間から己の魔羅を挿み出し眼前の痴態を餌に自慰行為を行っていた。

廖化と同じく、屈強な雄の肉体に溺れ狂いたいという願望を持つ雄として……。



【江賊出身】周泰

身の丈ほどもある大振りな青龍刀を振り回しては、色黒の男は周囲に突き立てられた粗雑な作りのかかしを次々と切り裂いていった。胸当てと肩当ては離れた場所に乱雑に置かれており、上半身の着物を肌蹴させ大きな動きで得物を操る。

柄を握る太い腕に血管が何本も浮かび上がり、あらん限りの腕力で殴り殺すように斬り裂く。長年の賊として過ごしたことにより色黒に焼けた地肌を、流れ出る大量の汗が濡らす。

男はやや鋭い顎まで顔を囲むように獅子髭を生やしており、野獣のように鋭い目を潰すように斬り抜いた傷跡を幾つも顔に残している。

る。

見れば、阿修羅のように無駄無く筋骨逞しく鍛えられた腕や胸板、腹筋や背筋にも数え切れない程の傷跡が痛々しく残っていた。

それらの多くの傷跡を隠すように鬱蒼と濃い体毛が全身を包むように茂っており、汗は体毛の一本一本に絡み付いては地肌に貼り付き筋肉の凹凸具合を強調させている。

「ふんっ！ふおっ！ふっはっうらあっ！うお
おおおおおっ！！」

軍の中でも実力者として勇名をはせている色黒の男、周泰（シュウタイ）は空気を轟かせるような重低音の雄叫びを上げて最後の案山子の頭を斬り落とした。軽い頭は余りの青龍刀の勢いで体ごと吹っ飛び、近くの木の幹に叩き付けられて弾け飛んだ。

肩で息をしながら足元に転がってきた案山

子の残骸を拾い、その切り口を確認する。ズレや歪みのない切り口を間近で確認すると、無表情のまま頷いて満足そうに口角を軽く上げる。

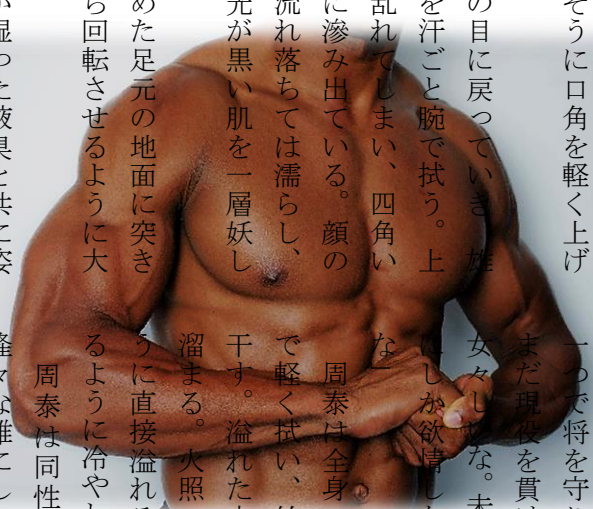
鋭い眼光が徐々に人の目に戻っていき、雄叫びで口から漏れた涎を汗ごと腕で拭う。上げた前髪が汗と熱気に乱れてしまい、四角い額からは汗が止まらずに滲み出ている。顔の傷跡に沿うように汗が流れ落ちては濡らし、枝葉の間から降り注ぐ光が黒い肌を一層妖しく黒光りさせる。

青龍刀を硬く踏み固めた足元の地面に突き立てると利き腕を肩から回転させるように大きく振り回す。

体毛以上に濃い腋毛が湿った腋臭と共に姿を現し、何気なく鼻を近づければ想像以上の雄臭さに思わず顔をしかめる。だが、どこか子

供のような無邪気さを残した笑顔を浮かべる。
「……我も随分と雄臭くなつたものだ。この身一つで将を守り抜いてはいるが、雄としてもまだ現役を貫けそうだ。……ふつ、我ながら女々しいな。未だに子を授かりたいなどと、雄はしか欲情しない雄には永久に叶わぬ夢幻だな」
周泰は全身の汗を近くの枝に掛けた布切れで軽く拭い、竹筒に溜めた水を勢い良く飲み干す。溢れた水が太い首筋を流れ落ち鎖骨に溜まる。大照って張りが増した筋肉を叩くように直接溢れると、汗を洗い流しながら撫でるように冷やしていく。

周泰は同性、しかも己と同じような筋骨隆々な雄にしか性欲を感じない性癖の持ち主である。これまで仲間と共に遊郭の女を抱き続けたが、女の柔肌では興奮せず雄の厚い肌



を妄想しながら達した経験すらある。

寧ろ、女の耽美な行為を凝視しながら集団で自慰行為に浸るのが好きだった。横目で仲間たちの大小様々な形状の勃起魔羅を凝視しながら、鼻息荒く射精をしていた。誰かに自分の視線の先が露見するのでは無いかという恐怖と背徳感が、唯一傷跡がない巨大な魔羅の感度を強くしていたのだった。

今日は戦も無く天気も良い実に平和な一日であつたので、周泰は一人森の中に籠り演武や己の鍛錬をし続けていた。己の技や癖を他人に見定めて貰うのは重要なことであるし、護衛すべき将から離れる訳にもいかない。だが、同時に己の弱点や死角を他人に教えてしまう可能性がある。そのため今回のような将が居ない遠征の場合は基本一人で黙々と汗を流している。

「むふう……もう陽が高いな。水浴びをしたら昼飯にするか。丁度良く腹も減ってきているしな」

中身が空になりつつある腹筋を軽く叩いてから青龍刀を鞘に戻すと、脱ぎ捨てた胸当てと肩当てを拾いそのまま川の流れる方向へと歩き出した。

木々が生い茂る林は方向感覚を失いやすいが、太陽の位置と風の向き、そして何処からか微かに聞こえてくる川のせせらぎと雄たちの声を頼りに進んで行く。

そのまま問題なく川の近くまで辿り着くと、突然周泰の足が止まる。

「……？誰の声だ」

警戒するように柄を握り周囲を見渡す。目にはいつも通りの鮮やかな木々の緑が揺らめいているが、鼓膜には林に似つかわしくない

声が入っていた。

何かを我慢するようなくぐもった声で、野太い声質から大柄な雄らしい。抑揚をつけてはいるが発言というよりも叫びに似ており、息苦しそうに意味も無い言葉を羅列している。「怪我人、いや行き倒れか。……まさか敵の間者か?……確認すべきだな」

手に持った防具や道具を近くの木の根元にまとめて置くと、鞘から抜いて青龍刀を携えて声の聞こえる方角へと向かう。

足音を立てないよう注意して向かうと、見上げる程に高い崖の根元に近付いているのが分かった。木々の間から茶色い壁が見えるようになり、吹き抜ける風も壁の影によって涼しさを感じさせる。更に言えば頻繁に水浴びをする川とは正反対の場所であり、若干距離がある。

ふと、周泰は何かを思い出した。軍の部下たちが近くの崖下付近を溜まり場になっているとの噂を聞いた。どうやら日々の鍛錬もそこで行っているようだ。

「だとすると、この声は演武中の掛け声か。随分激しい声な分、相当身を入れているのだろう。……どれ程の出来か見させて貰おうか」

徐々に大きくなる声を鼓膜に響かせながら歩みを早める。いつの間にか涼しい風が途切れ逆に湿った生臭い熱気が充滿し始めていたが、周泰はそれを鍛錬の成果と思い込んで不審には思わなかった。

だからこそ、木の陰から廖化の凄まじい痴態を発見した時には心臓が破裂しそうなほどに驚いたのだった。

「あれは廖化か……っ!? な、何をやって……お、おお……!!」

柄を握る手から力が抜け、青龍刀が地面の上に音も無く落ちる。空いた両手で木の幹に全体重を掛けながら、地面に仰向けで倒れる廖化の姿を凝視する。

次第に全身から演武の時以上の熱が沸き立ち始め、滲み出る汗が真っ赤に火照った褐色の肌を濡らす。剥き出したままの胸板は乳首を硬く勃起させ、腹筋と肩でゆつくりと深く呼吸を繰り返し始める。

周泰が凝視しているとも知らず、廖化は己の魔羅と肛門を犯していた。得物である槍の柄を肛門に挿入させては激しく出入りさせ、同時に雄々しく勃起した魔羅を既に溢れていた子種を塗り込むように激しく扱き上げていた。

時折全身を弾ませるように痙攣させ、その度に野太くも甲高い喘ぎを涎と共に漏らして

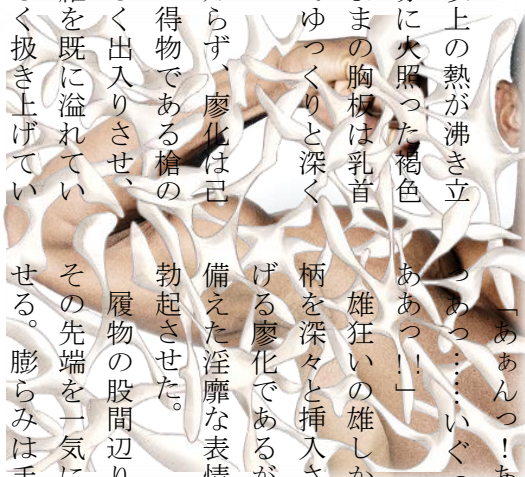
いる。周泰よりも肉付きが良く丰满な胸板と腹筋には子種と思われる粘液が前面に塗り込まれ、誘うような妖艶な照りを放っていた。

「ああんっ！あっあっあっあっあっあっあっ……いぐっ！？ひんっ！？んぐ……っあああっ！」

雄狂いの雄しかな弄ることを知らない肛門に柄を深々と挿入させながら、歓喜の喘ぎを上げる廖化であるが、その恍惚と切なさを兼ね備えた淫靡な表情はたちまち周泰の魔羅をも勃起させた。

履物の股間辺りの布地を大きく突き上げ、その先端を一気に粘り気を含んだ水気で湿らせる。膨らみは手淫による刺激を求めるように中で暴れ、その度に何も被さっていない先端が荒い布目に擦られ刺激を感じる。

周泰は傷だらけの厳つい顔を徐々に弱弱し



く緩めて恍惚に沈みながら、股間の動きに合わせて全身を痙攣させる。擦り上げる先端部の刺激が兵としての理性を失わせ、雄としての本能を目覚めさせる。

「はあ……はあ……はあ……はあ……ゆ、許せ……廖、化あ……！ お前の雄狂いした痴態、私の自慰に使わせてもらどうぞ……。」

腰紐を解く余裕も無いのか、無理やり履物の中に手を突っ込むと、外に魔羅を掴み出さないまま扱き始めた。指に挟まった陰毛が何本も抜けるのも厭わず、根元から亀頭まで大きな動きで扱う。

既に溢れて染みを作っている先走り指先に絡ませては亀頭のエラや尿道を執拗に弄り、脈打つ魔羅を一層太く長く厚く勃起させる。中で窮屈そうに湾曲した魔羅は股間一面に染みを広げていき、白い履物を透明にしてしま

う。

赤みを帯びた褐色をした肉の棒が、その凄まじい太さを誇示するように濡れた布地に押し付けられる。一団盛り上がった裏筋や側面に浮き出た血管、エラを広げて鈴口を伸縮させる桃色の亀頭の姿が、濡れた履物越しに鮮明に透き通って見えてしまった。

染みは徐々に面積を増し、手の動きも早くなる。本能に任せた荒々しい動きに腰紐が耐え切れず、遂に結び目から勢いよく千切れてしまった。弾け飛ぶ腰紐と同時に履物が力なく具足を履いた膝辺りまでずり落ちる。

周泰の棍棒の如き巨大な魔羅をかるうじて抑え込む禪の中にまで腕は突っ込まれており、締めが甘くなった股下から巨大な金玉が二つ零れ落ちている。小動物のように陰毛が生い茂った金玉は魔羅に持ち上げられながら、手

の動きに合わせて大きく揺れる。

禪の中に密封された熱気は雄臭さをネットリと纏いながら一気に溢れ出し、若干前屈みに体重をかける周泰の顎下から立ち昇る。己のモノとは思えない程に濃密で熱い臭気が鼻腔を直撃し、一層勃起を強める。

そもそも他人の魔羅の臭いなど嗅いだことの無い周泰にとつて、己の雄臭さだけでなく眼前から風に乗ってくる膠化の雄臭さも強烈な精力剤か催淫剤のように作用していた。

理性が碎けるように全身の穴という穴から体液が漏れ出し、涎や鼻水が汗と同じように顎鬚を汚しながら更に体毛茂る胸板や腹筋も粘着質に汚す。白く濁り始めた先走りは禪と大きな掌をネットリ汚し、金玉や蟹股に広げた内腿にまで伝い足元へと漏れる。

果てには隠れて入手した衆道の手引書に倣

って解していた肛門からも、生まれて初めて腸液が下痢をしたように滴り漏れていた。

引き締まった尻の谷間と陰毛に違和感の強い粘り気を与えながら禪を濡らす。背後からは大便までも失禁したかのような情けない姿に見える。

「ん、ぐうう……。はっはっはっはっはっはっ……んっ！はああはああはああはああはがああああ……っ！りよ、膠化あ……糞っ！りようかああああ……!!」

涎を垂らしながらも歯を食い縛り膠化の自慰行為を凝視し続ける周泰。その目は血走りと大きく見開かれ、見付からない様に息を殺しているのとは正反対に堂々と目蓋を持ち上げている。

肩を木に押し付けするようにして体を支え、と、離れた腕を涎で濡らす。そのままゆっくり

と背筋をなぞる様に指を這わせ、伸縮を繰り返す肛門に指先を引つ掛けるように挿入する。そのまま指を開いて緩まった肉を押し広げる、背筋に電流が走ると同時に腸壁が蠢き、生臭い腸液が一気に噴き出し、禪の外にまで漏れる。硬く引き締まった褐色の尻で唯一緩んでいる箇所、肛門に濡れて重くなつた禪の股布が強く食い込む。

魔羅に引つ張られて最大まで引つ張られた股布は金玉を根元から千切る様に強く縛り付け、既に手首まで挿入された肛門に咲いた雄臭い薔薇の花弁を扱きながら締め付ける。

震えている足は溢れる子種と泡立つた腸液の白で覆われていき、元の雄々しい褐色の太腿は隠れてしまう。代わりに、色の対比で上半身の褐色が一層濃い黒に染まったように見え、てしまい、汗と涎、噴き上がった子種で濡れた

筋肉は油でも被つたように照り輝いていた。

「み、見てくれえ！己れの中まで……己れの汚れた姿を全部見てくれよお。誰か、誰か見てくれえ……！己れを見たまま中に子種を仕込んでくれよお。己れ、このままでは切なすぎて頭が変になっちゃうよおお……!!」

「お、おお……分かつたぞ廖化。き、貴様の雄として最低で最高な破廉恥姿、我の両の眼にしっかりと、焼き付けて……やる……ぞ……んっ！く、ぐううう……わ、我も漏れ……。底に溜まった古い子種が……小便のように漏れてしま……っ!!んっ！んふう！んあ……く……く……っ!!」

声を殺しながら掠れた雄叫びを上げると、蟹股のまま腰を一気に激しく前後に動かす。同時に両腕による自慰行為も激化させて、溢れる雄の汚れた体液を躊躇なく漏らせるよう

に力を抜く。

その直後、完全に濡れて魔羅の全貌を完全に浮かび上げている禪越しに、爆発するような勢いで子種が噴き出した。真田状に霧状に拡散した子種を寄り掛かる木の幹を中心に、周囲にある全てのものを白く雄臭く汚した。粘つくような熱気が面積を一気に増して周囲に立ち昇り、大量の子種の重みで草が萎れたように倒される。

禪の中で鈴口に指を押し付けて押さえようとするが、それを押し返すような勢いで子種は噴き出し続ける。子種の染み込んだ禪が重くなり始め、自然とずり落ちてしまう。だが今の周泰は魔羅と肛門を弄ることに熱中しており抑える暇は無い。

そして、生臭い白に染まった禪が膝の高さまでずり落ちると、褐色の肌以上に黒く生い

茂った陰毛の塊が子種の粘液に絡まれながら現れる。そして、その中から突き上げるように勃起した魔羅が抑える指の間から勢い良く射精をした。

同時に、肛門の肉蕾からは強烈な臭いと熱気を纏った腸液が小便のように勢い良く噴出した。粘り気の強い油のような汚汁が、弾けるような汚い水音と共に足元の地面に染み込む。

「はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！は……はがあ……うごお……で、出た……出て、しまった……も、漏らして……しまった……。あ、ああでも、何だこの開放感、恍惚感……。私は……我は廖化に……部下に……!!」

同じ軍の部下の自慰行為を種にして己も自慰行為に走ったことに、徐々に後ろめたさを覚えてしまう。廖化の方に目をやると、絶頂に

達したようで大の字のまま仰向けに倒れている。激しい呼吸音がここまで聞こえてくる。

しかし、それ以上に己と同じ性癖、しかも重度の性癖を持つ者がいるのを確認できた事に、心なしか安心していった。

一人だけではない。我は特異な存在ではない。それだけでも随分と心が軽くなったように思える。

だが、今ここで廖化に声をかける勇気も気力も無かった。ここはあくまで戦場なのだ。気を抜きすぎてはいけない。

「……廖化、次は……一緒に過ごせたら良いな。……雄狂い同士、な」

肩で息をしながら呟くと、周泰は持ち物を拾ってからその場を後にした。本来の目的地である水浴び川に向かうために。

……よもや廖化と川の中ですぐ再会し、一

方的に気まずい雰囲気を作り出してしまったことには、今の段階で気付く訳など無かった。

了

発行者 : Mr.WOOD

発行日 : 2013 年 12 月 30 日

背景素材 : 『きまぐれアフター』 様

ピクシブ ID

<http://www.pixiv.net/member.php?id=807475>

ツイッターアカウント

<https://twitter.com/woodandleaf>

本誌のご購入・ご愛読、誠にありがとうございました。

今後とも、Mr.WOOD を応援宜しくお願いします！